

## 良き統治者を求める祈り

頭書に「ソロモンの歌」とあるように、この詩はエルサレム、シオン伝承に立つ「王」への期待を、特にシバの女王を驚かせた「知恵」による審きで有名なソロモンの故事(列王記上 10 章)を思いながら歌っているものである。しかし、特定の王というより王の役割への期待を述べたものである。また、72 編 20 節に「エッサイの子ダビデの祈りの終わり」あるように 150 の詩編の最初の 2 巻の部分的区切りとなる詩編である。

「王」(メレク)という語が日本語訳では、14 回も登場する。今日で言えば「為政者」「統治者」への期待であろう。王の役割を、神を畏れて正しい「審き」(mišpāt ミシュパート 公正)を行うことであるとして、手腕よりも「徳」に重きをおいている。神は王を通して世界を統治される。新共同訳は、例の如く「義」(ツェデカー=義)を「恵みの御業」と奇妙な訳にしている。

### 1. 義による審き (1-4)

2 節にも同じ「義」が登場するが、王には、社会的地位の上下や貧富、性別によらず、神の「民」を公平に義をもって審くことが重要である。「民」は王の臣民ではなく、「あなた」と呼びかける「神の民」であった。この時代には行政と司法は一体であった。王は「神の審き」に耳を傾け、それを民に伝えるのである。今日の日本の司法界には「正義を授けられるように」という祈りがあるのだろうか？2 節後半の「裁き=公正」も「ミシュパート」であり、特に「貧しい人々」に公平であるように願う。4 節にも「貧しい人々」、「乏しい人の子ら」が言及され、「平和」(シャローム)をもたらし、公平に「治める(ミシュパート)ように願う。

### 2. 王の支配 (5-7)

王の支配が太陽と月、恵みをもたらす雨に譬えられている。古来より神は太陽神あるいは月神で、エジプトそして日本は「太陽神」そしてメソポタミヤは月神であると考えられるが、イスラエルは被造物を神とはしない。「月の失われるときまで」(新月?)は分かりにくい！

### 3. 王の世界支配 (8-11)

神の義を代行する王の支配が、「大河」とはエジプトのナイル河、その上流にシバの女王の国があるが(ここでシバのシェバは何を、どこを指しているのだろうか)あるいは、ユーフラテス河か？何はともあれ、「大河」から地中海の島々を経て「地の果てまで」(タルシシ)に及ぶように、すべての王たち、クニがイスラエルの王を崇拜し、朝貢するようにと祈る。下手をすると、危ない祈りでもある。

### 4. 貧しい者の救済 (12-14)

王の仕事は単に義なる裁判だけではなく、救済・福祉活動が期待されている。弱肉強食の社会では「乏しい人」助けのない「貧しい人」、「弱い人」の救済、贖いが必要である。もちろん、貧しさの背後には「不法に虐げる者たち」がいたのであろう。貧しい者、乏しい者の尊厳(血)が王の前で守られることが願われている。参照イザヤ 43:3-4

## 5. 王のための執り成しの祈り (15)

15 節には為政者への執り成しの祈りがささげられている。絶え間なく(日々) 継続的に、「彼のために人々が常に祈り、彼を祝福しますように (文字通りには「賛辞を捧げる」)。」王の健康、そして、シェバの富も与えられるように。

## 6. 五穀豊穡と祝福 (16-19)

イスラエルの地には穀物が稔り、人口は野の草のように増加し、彼(王)の名がとこしえに栄えるようにと祈る。諸国の民は彼によって祝福され、彼が彼らによって祝福されるようにとの双方向の祝福である。五穀豊穡への祈願はどこかの「クニ」でもその民衆の祈りなのだろう。

最後は主なる神への賛美で終わる。神は「イスラエルの神」であると告白する。彼の栄光で全地が満たされるように。人の栄光・光栄が主なる神、唯一の主の栄光の背後に隠れるように！ そして、応答の「アーメン」2唱。主なる神への感謝と賛美こそ人のなすべきことであろう。